

博士論文（要約）

論文題目 近・現代日本語の謙讓表現に関する研究

氏名 伊藤 博美

目次

序章 本研究の目的と方法

1. 本研究の背景と動機
2. 先行研究概観と問題の所在
 2. 1 敬語研究史概観—謙讓語を中心に—
 2. 2 文法現象としての把握—松下(1923)・山田(1924)の場合—
 2. 3 関係規定としての把握—時枝(1941)の場合—
 2. 4 敬語的人称の設定・素材敬語と対者敬語の二大別—石坂(1944)・辻村(1963)の場合—
 2. 5 運用面も重視した謙讓語の把握—渡辺(1973)・大石(1978)の場合—
 2. 6 現代の謙讓語の扱い—菊地(1994)、蒲谷等(2001)の場合—
 2. 7 ポライトネス理論上の謙讓語の扱い
3. 先行研究からうかがえるもの
 3. 1 敬語像の変遷と「謙讓語」という名称
 3. 2 敬語の「正しさ」とそこに見られる意識
 3. 3 謙讓語の扱いの難しさ
4. 本研究の目的と方向性
5. 本研究の方法と展開

第I部 近・現代の謙讓語の機能とその成立

第1章 現代の謙讓語の使用条件—「お／ご～する」を例に—

1. はじめに
2. 「お／ご～する」成立に関する先行研究
3. 検討方法
 3. 1 用いる資料とその性格
 3. 2 検討方法の実際
4. 「お／ご～する」成立の条件
 4. 1 動詞の分類とタイプ
 4. 2 A群
 4. 2. 1 動詞の語彙的意味と表現としての成立・不成立について
 4. 2. 2 格表示による働きかけの違いと表現としての自然さ
 4. 3 B群
 4. 4 C群
 4. 5 不成立のもの

まとめと考察6.

「お／ご～する」と「お／ご～申し上げる」との比較

第2章 近・現代における謙讓語の成立と展開①

－先行研究と明治・大正期の使用例から－

1. はじめに
2. 先行研究から
3. 資料と方法
4. 明治・大正期の文学作品にみる使用例
 4. 1 二葉亭四迷の場合－『浮雲』『其面影』を中心に－
 4. 2 夏目漱石の場合－主要作品を中心に
 4. 3 その他の作家の場合
5. 「お／ご～申す」の位置づけについて
 5. 1 従来の位置づけと疑問
 5. 2 再考の必要性

第3章 近・現代における謙讓語の成立と展開②

－「お／ご～申す」と「お／ご～する」を中心に－

1. はじめに
2. 先行研究と問題の所在
3. 「お／ご～申す」と「お／ご～する」の使用状況・形式内に入る語
4. 「お／ご～申す」と成立期・現代の「お／ご～する」との違い
5. 考察

第4章 近・現代における謙讓語の成立と展開③

－「お／ご～する」への移行と「させていただく」－

1. はじめに
2. 問題の所在と本章の構成
3. 「お／ご～申す」と「お／ご～する」の相違と受影性配慮
4. 「お／ご～する」における表現形の拡張
5. 「させていただく」の成立と展開
 5. 1 先行研究
 5. 2 「させていただく」の成立と展開
6. まとめと考察

第5章 近・現代における謙讓語の成立と展開④

－「お／ご～申す」と「お／ご～いたす」－

1. はじめに
2. 先行研究と両形式の位置づけ
3. 江戸末期の「お／ご～いたす」と「お／ご～申す」
4. 「お／ご～いたす」と「お／ご～申す」の相違と丁寧語共起
5. 考察とまとめ

第6章 近・現代における謙讓語の成立と展開⑤

一形式の消長と受影性配慮一

1. はじめに
2. 従来の四形式の扱い
3. 「お／ご～申し上げる」と「お／ご～申す」
4. 四形式の使用状況と使用比率
5. 四形式の相違点の整理
6. 考察
 6. 1 近代以降の社会状況と敬語システムの変更
 6. 2 受影性配慮と謙讓語形の消長・発達との関連性

第II部 謙讓語使用に関する意識と今後の変化

第7章 謙讓語と関連表現にみる話者認知①

1. はじめに
2. 従来の方法の問題点と新たな観点の有効性
 2. 1 従来の研究の観点と問題点
 2. 2 新しい観点による研究の有効性
3. 調査の概要と被調査者の特性
 3. 1 調査の概要
 3. 2 調査地とその特性
 3. 3 調査方法の実際
4. 敬語意識と「正用」「誤用」をめぐる自然度判断
 4. 1 いわゆる「敬語意識」について
 4. 2 調査概要と「正用」「誤用」の判断基準
5. 一対比較法による自然度測定結果
 5. 1 全体結果と分析
 5. 2 属性別自然度判断傾向
 5. 3 自然度判断にみる性差・世代差
 5. 4 敬語行動意識と自然度判断との関連性
6. まとめと考察

第8章 謙讓語と関連表現にみる話者認知②

1. 自然度判断と意識構造との関連
2. 「正用」「誤用」に関する判断基準と意識構造
 2. 1 「お／ご～する」の尊敬語転用に関わる先行研究
 2. 2 「お／ご～する」の認知判断と尊敬語転用
3. 「お／ご～される」の認知判断と尊敬語転用
4. その他の表現にみる判断基準と意識構造
 4. 1 格構造と自然度判断
 4. 2 敬度判断をめぐる意識構造

4. 3 「レル敬語」と「お／ご～になる」との敬度比較
4. 4 「お／ご～なさる」と「お／ご～される」との敬度比較
5. まとめ

第9章 受益表現と敬意をめぐる問題

1. 問題の所在と先行研究
 1. 1 問題の所在
 1. 2 先行研究
2. 「てくれる」文における受益と恩恵
3. 「てもらう」文における受益と恩恵
4. 受益と恩恵に関する新しい視点の有効性
5. 依頼表現にみる「てくれる」文と「てもらう」文
6. 「てくれる」文と「てもらう」文の丁寧度の違い
7. 敬語における上下関係と丁寧度
8. 両形式の違いの発生要因

第10章 自然度判断と意識構造からみた謙讓語の今後

1. はじめに
2. 「お／ご～する」とその周縁的表現の尊敬語化
 2. 1 先行研究
 2. 2 話者の意識構造
 2. 3 今後の変化の方向性
3. 「させていただく」に関する使用判断と今後の変化
 3. 1 はじめに
 3. 2 先行研究
 3. 3 調査方法の実際
 3. 4 結果と分析
 3. 5 考察
4. まとめ

終章 まとめと今後の課題

1. 本研究のまとめ
2. 今後の課題

参考文献等一覧
既発表論文との関係

[凡 例]

- 1 表記に関しては、以下の方針に従った。
 - a 引用や用例提示に際しては、適宜新字に改めた。

- b 送り仮名については、そのままとした。
- 2 注については、以下の方針に従った。
 - a 本文については、同ページに脚注として示した。
 - b 図表については、※としてその直下に示した。
- 3 出典は作品名を記した。出典の明記のない用例は作例である。
- 4 用例に付した記号は以下の意味で用いた。
 - a *：規範的と思われる現代日本語に対し、文法的でない。
 - b ?：規範的と思われる現代日本語に対し、文法的に不自然に感じられる。
 - c ??：規範的と思われる現代日本語に対し、文法的に不安定に感じられる。
 - d #：規範的と思われる現代日本語に対し、文法的ではあるが語用論的に不自然である。

本文

5年以内に出版予定である。

参考文献一覧

(1) 参考文献

- 穂田 定樹 (1976) 『中古中世の敬語の研究』 清文堂出版
- 茜 八重子 (2002) 「「～(さ) せていただく」について『講座日本語教育』38
早稲田大学日本語研究教育センター
- 庵 功雄・高梨 信乃・中西久美子・山田 敏弘(2000)
『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』
スリーエーネットワーク
- 庵 功雄 (2001) 『新しい日本語学入門ーことばのしくみを考える』
スリーエーネットワーク
- 石坂 正蔵 (1944) 『敬語史論考』 大八州出版
- 石野 博史 (1986) 「敬語の乱れー誤用の観点からー」『ことばシリーズ 24 続敬語』
文化庁
- 井島 正博 (1997) 「授受動詞の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』32
- 井島 正博 (2011) 『中古語過去・完了表現の研究』 ひつじ書房
- 井出 祥子 (2017) 「敬意表現と日本文化ー「場の考え」からのアプローチー」『日本語学』36-6 明治書院
- 井出 祥子・荻野 綱男・川崎 晶子・生田 少子 (1986)
『日本人とアメリカ人の敬語行動』 南雲堂
- 伊藤 博美 (2009) 「承接形謙讓語に関する適切性判断と尊敬語転用ー「お／ご～する」と
「お／ご～される」をめぐってー」『日本語学論集』5
東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 伊藤 博美 (2010) 「授受構文における受益と恩恵および丁寧さー「てくれる」文と「てもら
う」文を中心としてー」『日本語学論集』6
東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 伊藤 博美 (2011) 「「(さ) せていただく」表現における自然度と判断要因」『日本語学論
集』7 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 伊藤 博美 (2013a) 「「お／ご～申す」と「お／ご～する」ー働きかけのあり方とその
消長ー」『近代語研究』17 武蔵野書院
- 伊藤 博美 (2013b) 「働きかけの諸相からみた「お／ご～する」の条件」
『国語と国文学』90-1 東京大学国語国文学会
- 伊藤 博美 (2015) 「近代以降の謙讓表現における受影性配慮についてー「お／ご～申す」
「お／ご～する」「させていただく」ー」『近代語研究』18 武蔵野書院
- 伊藤 博美 (2016) 「お／ご～申す」と「お／ご～いたす」ー聞手意識と受影性配慮ー
『近代語研究』19 武蔵野書院
- 井上 史雄 (1979) 「敬語の西高東低」『言語』28-11 大修館書店
- 井上 史雄 (1999) 『敬語はこわくないー最新用例と基礎知識』 講談社現代新書

- 岩下 豊彦 (1983) 『SD法によるイメージの測定』 川島書店
- 上野田鶴子他(1978) 「幼児期における授受構文の理解に関する実験的研究」 科研費『言語情報と音声信号の相互変換に関する総合的研究』 日本音響学会
- 宇佐美まゆみ(2002) 「ポライトネス理論の展開③」『言語』31-3 大修館書店
- 大石初太郎 (1975) 『敬語』 筑摩書房
- 大石初太郎 (1976) 「待遇語の体系」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』 表現社
- 大石初太郎 (1983) 『現代敬語研究』 筑摩書房
- 大曾美恵子 (1987) 「誤用分析6 あした試験をお受けします」『日本語学』16-2 明治書院
- 荻野 綱男 (1986) 「待遇表現の社会言語学的研究」『日本語学』5-12 明治書院
- 小野 正樹 (2001) 「「ト思ふ」述語文のコミュニケーション機能について」『日本語教育』110 日本語教育学会
- 加藤 正信 (1973) 「全国方言の敬語概観」『敬語講座⑥現代の敬語』 明治書院
- 蒲谷 宏 (1992) 「「お・ご～する」に関する一考察」『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』 明治書院
- 蒲谷 宏・川口 義一・坂本 恵 (1998) 『敬語表現』 大修館書店
- 蒲谷 宏 (2003) 「「表現行為」の観点から見た敬語」『朝倉日本語講座8 敬語』 朝倉書店
- 蒲谷 宏 (2008) 「なぜ敬語は三分類では不十分なのか」『文学』9-6 岩波書店
- 蒲谷 宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』 大修館書店
- 菊地 康人 (1978) 「敬語の性格分析—先学の敬語論と私自身の把握—」『国語と国文学』55-12 東京大学国語国文学会
- 菊地 康人 (1979) 「「謙讓語」について」『言語』8-6 大修館書店
- 菊地 康人 (1980) 「上下待遇表現の記述」『国語学』122 国語学会
- 菊地 康人 (1994) 『敬語』 角川書店
- 菊地 康人 (1996) 『敬語再入門』 丸善ライブラリー
- 菊地 康人 (1997) 「変わりゆく「させていただく」」『言語』26-6 大修館書店
- 菊地 康人 (2005) 「「敬語とは何か」がどう変わってきているか」『日本語学』24-11 明治書院
- 菊地 康人 (2008) 「敬語の現在」『文学』9-6 岩波書店
- 菊地 康人 (2017) 「敬語的なものを広く捉えようとする事について」『日本語学』36-6 明治書院
- 金水 敏 (1989) 「敬語優位から人称性優位へ」『女子大文学』国文篇 40 大阪女子大学
- 金水 敏 (2004) 「敬語動詞における視点中和の原理について」『文法と音声IV』 音声文法研究会(編) くろしお出版
- 金水 敏 (2010) 「「敬語優位から人称性優位へ」再考」『語文』第92・93輯 大阪大学国語国文学会
- 国広 哲弥 (1982) 『意味論の方法』 大修館書店
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 久野 暲 (1978) 『談話の文法』 大修館書店

- 窪田 富男・池尾 スミ（著作権者は文化庁）（1971）『日本語教育指導書 2 待遇表現』
大蔵省印刷局
- 窪田 富男（1993）「敬語動詞の状態性と動作性」『松田徳一郎教授還暦退官記念論集』
研究社
- 窪田 富男（2003）「「お～する」の語用論的考察の一側面」『日本語学と言語学』
玉村文郎編 明治書院
- 熊田 道子（2001）「待遇意識からみた「～てくれる」系表現と「～てもらおう」系表現」
『国語学研究と資料』25 早稲田大学
- 国語審議会（1952）「これからの敬語」（文部大臣に対する建議）
- 国立国語研究所（1982）『企業の中の敬語』国立国語研究所報告 73 三省堂
- 国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識－岡崎における 20 年前との比較－』
国立国語研究所報告 77 三省堂
- 小松 寿雄（1963）「待遇表現の分類」『国文学言語と文芸』5-2
東京教育大学国語国文学会
- 小松 寿雄（1967）「「お…する」の成立」『国語と国文学』44-4
東京大学国語国文学会
- 小松 寿雄（1968）「「お…する」「お…いたす」「お…申しあげる」の用法」
『近代語研究』2 武蔵野書院
- 小松 寿雄（1971）「近代の国語Ⅱ」『講座国語史 5 敬語史』辻村敏樹（編）大修館書店
- 近藤 泰弘（1986）「敬語の一特質」『築島裕博士還暦記念国語学論集』明治書院
- 近藤 泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 真田 信治（1973）「越中五ヶ山郷における待遇表現の実態」『国語学』93 国語学会
- 澤田 淳（2007）「日本語の授受構文が表す恩恵性の本質－「てくれる」構文の受益を
中心として」『日本語文法』7-2 くろしお出版
- 柴田 武（1957）「「お」の付く語・付かない語」『言語生活』70 筑摩書房
- 柴谷 方良（1978）『日本語の分析－生成文法の方法－』大修館書店
- 渋谷 勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
- 杉崎 一雄（1988）『平安時代敬語法の研究－かしこまりの語法とその周辺－』有精堂
- 杉崎 夏夫（2003）『後期江戸語の待遇表現』おうふう
- 鈴木 睦（1989）「聞き手の私的領域と丁寧表現－日本語の丁寧さは如何にして成り
立つか－」『日本語学』18-2 明治書院
- 鈴木 睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』
田窪行則（編）くろしお出版
- 砂川有里子（1984）「「ニ」と「カラ」の使い分けと動詞の意味構造について」
『日本語・日本文化』12 大阪外国語大学研究留学生別科
- 高見 健一（2000）「被害受身文と「～にVしてもらおう」構文」『日本語学』19-5
明治書院
- 滝浦 真人（2001）「〈敬意〉の綻び」『言語』30-12 大修館書店
- 滝浦 真人（2005）『日本の敬語論－ポライトネス理論からの再検討－』大修館書店
- 滝浦 真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

- 田中 良久 (1977) 『心理学的測定法』 東京大学出版会
- 辻村 敏樹 (1966) 『敬語の史的研究』 東京堂出版
- 辻村 敏樹 (1971) 「敬語史の方法と問題」『講座国語史5』 大修館書店
- 辻村 敏樹 (1974) 「明治大正時代の敬語概観」『敬語講座⑤明治大正時代の敬語』
明治書院
- 辻村 敏樹編(1991) 『敬語の用法 角川小辞典6』 角川書店
- 辻村 敏樹 (1992) 『敬語論考』 明治書院
- 角田 太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版
- 時枝 誠記 (1941) 『国語学原論』 岩波書店
- 豊田 豊子 (1974) 「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』
1 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』 大修館書店
- 永田 高志 (2001) 『第三者待遇表現史の研究』 和泉書院
- 中村 春作 (1994) 「「敬語」論と内なる「他者」」『現代思想』22-9 青土社
- 西田 直敏 (1998) 『日本人の敬語生活史』 翰林書房
- 沼田 善子 (1999) 「授受動詞文と対人認知」『日本語学』18-9 明治書院
- 芳賀 純 (1997) 「ことばと心理」『日本語学』16-10 明治書院
- 橋元 良明 (2001) 「授受表現の語用論」『言語』30-5 大修館書店
- 日高 水穂 (1995) 「オ・ゴ～スル類と～イタス類と～サセテイタダクー謙讓表現ー」
宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版
- 姫野 伴子 (2004) 「「～させていただく」文の与益・使役者と動作対象について」
『留学生教育』6 埼玉大学留学生センター
- 福島 直恭 (2017) 「敬語史への新視点」『日本語学』36-6 明治書院
- 文化庁 編 (1976) 『ことばシリーズ5 言葉に関する問答集2』 大蔵省印刷局
- 文化審議会 (2007) 「敬語の指針」(答申)
- 益岡 隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- 益岡 隆志 (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30-5 大修館書店
- 丸元 聡子・白土 保・井左原 均(2000) 「敬語表現の誤用」『信学技報』電子情報通
信学会
- 松下大三郎 (1923) 「國語より觀たる日本の國民性」『國學院雑誌』29-5
- 松下大三郎 (1930) 『改撰標準日本文法(昭和5年訂正版)』 中文館書店
- 南 不二男 (1973) 「敬語の体系」『敬語講座①敬語の体系』 明治書院
- 南 不二男 (1987) 『敬語』 岩波書店
- 南 不二男 (1997) 『現代日本語研究』 三省堂
- 三宅 陽子 (2008) 「話題の選択と展開に見るポライトネスーディスコースレベルから捉
えた相互行為ー」『文学』9-6 岩波書店
- 宮地 裕 (1965) 「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63
国語学会
- 宮地 裕 (1967) 「現代敬語の一考察」『国語学』72 国語学会
- 宮地 裕 (1971) 『文論 現代語の文法と表現の研究1』 明治書院

- 森田 良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』 明治書院
- 森山 卓郎 (1992) 「文末思考動詞「思う」をめぐって」『日本語学』 11-5 明治書院
- 森山 卓郎 (2013) 「丁寧語について」『国語と国文学』 90-7 東京大学国語国文学会
- 森山由紀子 (1990) 「謙讓語成立の条件－「謙讓」の意味をさぐる試みとして－」
『奈良女子大学文学部研究年報』 33 号 奈良女子大学
- 森山由紀子 (1993) 「謙讓語の何が変わったのか－用法・意味・機能の再考を通して」
『同志社女子大学日本語日本文学』 9 同志社女子大学
- 森山由紀子 (2002) 「尊者定位重視の敬語から自己定位重視の敬語へ」
『同志社女子大学学術研究年報』 53-1 同志社女子大学
- 森山由紀子 (2003) 「謙讓語から見た敬語史、丁寧語から見た敬語史－「尊者定位」から
「自己定位」へ－」『朝倉日本語講座 8 敬語』 朝倉書店
- 森山由紀子 (2010) 「現代日本語の敬語の機能とポライトネス--「上下」の素材敬語と「距離」
の聞き手敬語－」『同志社女子大学日本語日本文学』 22 同志社女子大学
- 森 勇太 (2012) 「オ型謙讓語の用法の歴史－受益者を高める用法をめぐって－」
『語文』 98 大阪大学国語国文学会
- 森 勇太 (2016) 『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』 ひつじ書房
- 森 勇太 (2017) 「敬語運用への新視点－多様性から捉え直す日本語の敬語－」『日本語学』 36-6 明治書院
- 山崎 久之 (1963) 『国語待遇表現体系の研究』 武蔵野書院
- 山崎 久之 (1990) 『続国語待遇表現体系の研究』 武蔵野書院
- 山田 敏弘 (2001a) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第 12 回～させて
もらう(1)」『日本語学』 20-10 明治書院
- 山田 敏弘 (2001b) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第 13 回～させて
もらう(2)」『日本語学』 20-12 明治書院
- 山田 敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ－「てやる」「てくれる」「てもらう」の
文法－』 明治書院
- 山田 孝雄 ([1924]1981) 『敬語法の研究』 宝文館出版
- 山梨 正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房
- 吉岡 泰夫 (2000) 「敬語使用と規範意識の社会差・地域差」『計量国語学』 22-6
- 湯澤幸吉郎 (1954) 『増訂江戸言葉の研究』 明治書院(1992 増訂版)
- 湯澤幸吉郎 (1955) 『徳川時代言語の研究』 風間書房
- リーチ G. N (1987) 『語用論』 池上嘉彦・川上誓作訳 紀伊國屋書店
- ロドリゲス／土井忠生訳(1955) 『日本大文典』 三省堂
- 渡辺 実 (1960) 「敬語が正しい・正しくないということ」『言語生活』 102
筑摩書房
- 渡辺 実 (1971) 『国語構文論』 塙書房
- 渡辺 実 (1973) 「上代・中古敬語の概観」『敬語講座 2』 明治書院
- 渡辺 実 (1974) 『国語文法論』 笠間書院
- 渡辺 実 (2008) 「敬語における使用規則不使用規則」『文学』 9-6 岩波書店

Brown, Penelope and Levinson, Stephan C. (1987)

“Politeness: some universals in language usage” Cambridge University Press.

Matsumoto, Yoshiko (1997) The rise and fall of Japanese nonsubject honorifics: The case of
'*o-Verb-suru.*' Journal of Pragmatics 28

Takashi Masuoka (1981) “Semantics of the Benefactive Constructions in Japanese”
Descriptive and Applied Linguistics, 14 ICU

(2) 調査・用例出典

○江戸語資料

お染久松色読販・小袖蘇我薊色縫『歌舞伎脚本集下』(平安期に材をとった『名歌徳三
舛玉垣』は表現によって除いた)、『黄表紙洒落本集』全作品、鹿の子餅・聞上手・鯛の
味噌津・無事志有意『江戸笑話集』、春色梅児誉美・春色辰巳園『春色梅児誉美』、『東海
道中膝栗毛』『浮世風呂』いずれも日本古典文学大系(岩波書店)、『噺本大系』(東京堂
出版)第9巻～16巻、『花筐』(東京大学国語研究室蔵)

○明治期～大正期資料

英國孝子之傳・眞景累ヶ淵・名人長二『三遊亭円朝集』明治文学全集 10(筑摩書房)、
『二人女房』(岩波文庫)、『当世書生気質』(東京大学総合図書館蔵)、『CD-ROM 版明治
の文豪』『CD-ROM 版大正の文豪』(新潮社)全作品(ただし、文体の特殊性から前時代
的な表現の多い、芥川の『白』以外の作品、菊池寛『藤十郎の恋』、鷗外の歴史、翻訳物
等は除いた。)、『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』、武者小路実篤『その妹』武者
小路実篤全集(小学館)、宮本百合子『日記』宮本百合子全集第17巻(新日本出版社)、
池谷信三郎『橋』現代日本文学全集 86(筑摩書房)

○上記以外 『竹取物語』『源氏物語』いずれも新編日本古典文学全集(小学館)
『浜松中納言物語』日本古典文学大系(岩波書店)

(3) 参考資料

小泉 保・船城 道雄・本田 晶治・仁田 義雄・塚本 秀樹編(1989)『日本語基本動
詞用法辞典』大修館書店

文化庁文化庁国語課(1997,1998,1999,2000,2001,2002,2003,2004)『国語に関する世論調査』
新潮社(1995)『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』新潮社

Crystal, D (1987, 訳 1992) The Cambridge Encyclopedia of Language, Cambridge University
Press, 1987『言語学百科事典』風間・長谷川訳 大修館書店

要 旨

1. 本研究の目的と方法

本研究は近・現代日本語の謙讓表現およびその周辺の表現に関して、語形・表現形の成立条件と形式・用法の通時的変遷に加えて、現在の話者意識とそれによる今後の変化傾向等について多面的に検討することで、その本質の記述を目指したものである。

まず序章において、敬語体系および謙讓語に焦点化する形で先行研究を概観・検討した。その結果、従来の研究においては、昭和前期以降を一つの共時態として扱い、個々の表現の使用実態・ルール等の詳細な記述・解明が中心に行われてきたことなどが確認された。他方で、個々の形式の発生・維持の理由、その背後にある語形および表現形生成の原理とその変化等に対する考察が不十分のように思われ、以下のような観点を設定した。

- 1) 現代語の謙讓語とそれを含んだ表現形全体を成立させている諸条件、その背後に存在すると思われる原理とはどのようなものか。
- 2) 1の諸条件およびその背後の原理は近代以降どのように変化してきたのか。あるいは変化していないのか。またそうした原理を変化させてきたものとは何か。
- 3) 主として近代以降に発達した諸形式について、それらはどのような形で、1の諸条件とその背後の原理を担っているのか。また、形式によって担い方の違いはあるのか。
- 4) 現代の謙讓表現に対する人々の意識（個々の表現に関する使用判断・決定に関する意識、敬語全般に対する現状認識・規範意識・指向意識等）とはどのようなものか。また、それは語形・表現の認知・選択にどのような影響を与えているのか。
- 5) 1～4をふまえ、謙讓表現およびその周辺の表現は今後どのように機能と形式を変えていくのか、あるいは変えていかないのか。変えていくとすれば、そこに方向性などはあるのか。

こうした問題意識のもとにⅡ部構成を取り、異なるアプローチによって論じた。上記1～3については第Ⅰ部で、現在の話者意識と今後の変化予測に関する4～5については、主として第Ⅱ部で扱い、最後にⅠとⅡから今後の変化傾向と将来予測等を述べた。

以下、結果と考察について簡潔に述べる。

2 結果と考察

【第Ⅰ部】

まず、現代の「お／ご～する」形の語形的・表現的・語用論的成立条件について整理し、以下の結論を得た。

- I. 主語から、人格を有するものとしての存在認識を伴う補語への具体的な行為を通じた働きかけを実現可能にする動詞（と一部の名詞）のみが「お／ご～する」形をとる。ただし、意図的加害性の表現としての働きかけの場合は不可である。

Ⅱ. I の働きかけを実現しつつ、行為全体として補語の人格的領域への意図的加害性がないとみなされる場合のみに「お～する」形を含んだ表現が可能になる。

次に、それ以前に成立した「お／ご～申す」「お／ご～いたす」「お／ご～申し上げる」と比較してその相違点を明確にするとともに、明治半ばから使用され、次第に使用条件を変化・拡大してきた「させていただく」を加えた、計五形式の消長と発達について論じた。その結果、以下のことが確認できた（以下、それぞれ「お～」とする）。

①「お～申す」

江戸初期頃から形を整えはじめ明治後期までの主流であった「お～申す」は、働きかけの有無やその内実には関わらずに補語への敬意を表せる生産的形式の代表であった。ただし、「お～する」の成立以降（明治30年頃から明治末にかけて）次第に使用が減少するとともに、特に二人称（聞手）を補語とするあらたまった場面を中心に使用されるようになり、その後さらに使用が漸減して今日ではほとんど使用されなくなった。

②「お～いたす」

江戸末期頃に成立し、その後も安定的に使用された「お～いたす」は、成立当初から形式内に取り得る語は「お～する」と同様、意図的加害性を持たないものに限られていた（つまり現代と同様）。また、主語は一人称側の人間に限ること、二人称（聞手）を補語として行為の申し出中心に使用されること、常に丁寧語と共起することからも、成立当初から補語と聞手両者に対する敬語として機能していた。

③「お～する」

明治30年頃に成立し、明治末年頃までに謙譲語Aとしての地位を確立した「お～する」は、成立当初から現代に至るまで、その機能に加えて形式内に取り得る語、表現全体の成立条件は基本的に変わっていない（上記Ⅰ・Ⅱ）。ただし、「お作りする」「お持ちする」などの間接的用法（補語へのモノを媒介とした働きかけなど）は、後になって（大正初めから昭和初め頃）成立した。

④「お～申し上げる」

江戸期頃から使用された「お～申し上げる」は、形式内に入る語について「お～いたす」や「お～する」と同様の制限があった。ただし、丁寧語共起が非義務的な点、二人称主語にも使用可能である点で「お～いたす」とは異なり、特に現代において「恨む」などの意図的加害性を持った語の一部を取ることができる点で、「お～する」とも異なっている。

⑤「させていただく」

本来の、補語による使役・許可の用法から、大正初め頃になって主語の行為による補語への影響の内実には配慮したものとして、擬似的許可を用いた用法（「新聞を読ませていただいた」など）へと拡張した。

これらから、近世末以降の謙譲語の成立とその展開・消長には、補語の影響の受け方・被影響の内実に対する話者の意識が最も強く作用していることが確認され、それを「受影性配慮」と名付けた。受影性配慮は、加害的な行為あるいはそれに準ずる行為に対して形式的に敬意を表現することに強く矛盾を感じることもつながっていく。

また、受影性への敏感さは、次第に表現の拡張へとつながり、「お持ちする」「お調べする」などの間接的受影性（補語への授益）を意識した謙讓語形（本研究ではBタイプとしている）を生み出すとともに、主語の行為による補語への心理的影響等を考慮しつつ、「させていただく」の拡張用法（使役・許可者が想定しにくい場合）を生じさせたことなどが確認された。

【第Ⅱ部】

謙讓語に関する現代話者の多様な意識調査とともに、因子分析等の統計手法を用いた各種表現形に対する認知構造の分析を行い、敬語使用に関わる動機や意識とその背景、今後の語形および語用論的条件の変化の様相を明らかにした。敬語は、精緻な文法システムを持ちつつも、対人関係構築とその維持等が重要な動機となっている以上、選択される語形や運用規則は、話者の多様な意識下でその都度決定されるものであると考え、個人差についても積極的に着目し、おおよそ以下の結果を得た。

- ①一対比較法等を用いた各種「誤用」表現に関する自然度調査・検査から、「誤用」はタイプ別に認識されているとともに、その正誤判断には狭義の敬語以外の要因が複雑に働いていることが確認された。また、その判断に関わるものとして、上下意識が最も影響力の強い要因であることが確認された。
- ②形として「お～する」を含んだ表現の自然度判断は、当該形式が謙讓語の用法を持つかどうかを中心にして、全体の待遇価の高さ・授益性などが副次的に、かつ階層性を持って作用した上で決定されている。また、ヲ格とニ格など、複数の格を取る語を含む「お～する」形の場合（「ご案内する」など）、待遇対象の認知と格の強弱をめぐって混乱が起りやすく、それが自然度判断に大きく影響、あるいは干渉することが確認された。
- ③誤用表現とされる「お／ご～される」の自然度判断の際、話者は「お／ご～」と「される」とに分割する形で、敬語要素を加算的に捉えている。それに加えて「お～する」形が謙讓語として機能するものとの干渉が働き、なおかつ「お／ご～」の部分の独立性が低いと強く不自然さを感じるなど確認された。
- ④「お～なさる」と「お～される」の丁寧度判断であるが、「お／ご」に「レル敬語」が加算されたものと捉えられるため、後者の使用を積極的に容認する意識が強いことが確認された。特に敬語の使用能力意識が高く、敬語機能の多様性を認めている被験者に「お～される」の容認度が高いことから、敬語使用の多様性とも相俟って「お～される」が敬度の高い尊敬語として定着していく可能性が高いことが示唆された。
- ⑤授受補助動詞「てくれる」と「てもらう」の丁寧度について、従来「てもらう」の方が「動作主を主語にしない」ことから丁寧とされてきたが、「丁寧度」は文法的側面からのみ決定するものではないこと、敬語に対する指向意識の違いによって丁寧度には違いが生じていることが確認された。話し手の持つ敬語に対する多様な意識・判断のあり方こそが、両者の丁寧度を決定するのであり、その諸相が明確になった。
- ⑥現在変化し続け、今後さらに機能上・運用上の変化が進むことが予測されている「お～する」形と「させていただく」の方向性であるが、両者とも、それぞれ変化を助長する要因と変化を阻害する要因がありつつも、変化の助長要因の方が優勢であることが確認

された。「お～する」は尊敬語・丁寧語的に、「させていただく」は謙讓語Bに近づき、将来的に棲み分けが行われる可能性が高いことが示唆された。

最後に第Ⅰ部と第Ⅱ部を総合し、江戸末期頃から次第に補語の影響の受け方・被影響の内実に対する話者の意識が強まるとともに、敬語全体における対者敬語化傾向と相俟って、語形・機能・運用上の変化がもたらされていることを述べた。